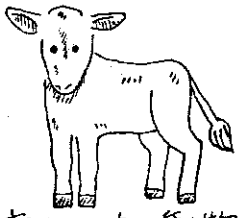
— 僕は、名も無き少年です。
少し前に知り合った農家の友人に手伝いの名目でいろいろとやらせてもらいました。
"農"という営みのかかわりの中で、自分はすでに大きな自然の流れに包まれていることに気づかされました。"生きがい"や"楽しみ"とは無関係にそこに在った何かは、僕達日本人が遠い昔から憧れとともに敬まってきたものであり、それはもう自分の魂に根づいているものでもあったように思います。
自分自身のルーツを知るために、それを守るために"農"を生活の中に活かしていくことが今後の僕の"宿題"です。

この男の子は、村と町の交流の場としての山小屋を作ったとき、村に1週間泊りこんで、手伝ってくれました。
環境問題を真剣に考え、試行錯誤しながら、前むきに自分の道を切り開こうとしている。この17才の少年に、私は、たくさんのことを教わりました。

産山でベーコン作りをやったのが楽しかった。
作るのはたいへんだったけど食べるときはおいしかった。
みんなといっしょにするのが楽しい



看病をしても、動物の死に直面したりする…。
この子たちが、おなかがはって具合が悪い子牛を、長い間マッサージして手当てをする姿を見て、涙がでそうでした。
動物の死、自分以外の者のために流す涙……
大事な学びです。
今、あの子牛は天国から、この子たちを見守ってくれてるでしょう…。

産山村で楽しかったのは、子うしにミルクをやったことです。
二ひきいて、一ぴきは病気でした。その子牛には、注しゃさでミルクをあげました。
マッサージもしてあげたのに、その子牛は、死んでしまったそうです。悲しいです。
もう一つ楽しかったことがあります。
それは、馬のさんぽにいったことです。
その馬の名前は「ミルフィーユ」といいます。
初めに、ミルフィーユにごはんをあげて、それからさんぽにいきました。
「ウラブシット」というしゅるいだけあって、かなり大きく、私は初めこわかったです。
ミルフィーユは、クローバーが好きでさんぽの道でも食べていました。
産山村は楽しいことがいっぱいあって大好きです。